

芝浦工業大学  
建築会会報  
第20号

# 建築会会報 第20号



芝浦工業大学 豊洲キャンパス 完成予想図

発行  
東京都港区芝浦3-9-14  
芝浦工業大学建築会  
2004.12.01

# 芝浦工業大学 建築会会報 第20号

発行  
東京都港区芝浦3-9-14  
芝浦工業大学建築会

## 建築会ホームページ開設

建築会副会長 佐藤久松

建築会会員の皆様、如何お過ごしでしょうか。今年も例年に劣らず異常気象が続き、猛暑の真夏日記録が更新されたかと思ったら、今度は大型台風が本土上陸記録を更新、同じ更新でもイチローの米大リーグ年間安打記録なら大歓迎ですが、これも地球温暖化現象の顕著な表れだと思います。京都議定書批准をようやくロシアが決めた今日、CO2最大の排出国であるアメリカが一日も早く批准してくれることを切望する限りです。

建築会も1967年発足以来、卒業生、院生、新旧教職員からなる会員数も六千名を越えました。会員情報誌である会報も、今年で20号を発行する運びとなりました。これも偏にこれまでの役員の方々、並びに会員の皆様方の努力の賜物と感銘しております。

今年度の建築会の最大事業はホームページを立ち上げたことです。以前からホームページ開設は切望されていましたが、今般石井会長を始め、特に事務局の阿部泰資君には絶大なご尽力を頂き開設する運びとなりました。大学並びに会員関連の最新ニュースを始め、各種イベント案内、会員の皆様の会社・事務所案内、卒業生や在校生への求人求職情報、法規や施工で困ったことの相談等色々便利に使えらると思います。又会員専用ページとして（事前にユーザー登録して下さい。学生も可です）各卒業年度生の行事案内、報告等に自由に利用できる場も設けてあります。ただ建築会のホームページはあくまでも会員の皆様方の運用・利用によって価値が生じるものであり、利用方法等に何か良いアイデアがありましたらぜひお寄せくださると共に、情報公開、情報交換の場として大いに活用して下さいをお願いいたします。

建築会運営に措きましても、校友会への対応、建友会との合併、若い卒業生の参画等々課題は山積ですが幹事の若返りを図り、若い人の発想で幅広い活動ができるよう、新たに常任幹事の推薦、不明確であった学年幹事の依頼等を着々と進め、又事務局も学外にも設け、より一層の発展を目指しております。今後とも会員の皆様方の暖かいご支援、ご尽力を宜しくお願いいたします。又厳しい経営環境の中、ホームページにバナーを掲載くださった企業様並びに本誌に広告の協賛を頂いた企業様に深く御礼申し上げます。

（1967年卒・佐藤久松一級建築士事務所）



# 光陰矢の如き芝浦時代の回顧1 教授 山本泰稔

来年3月、芝浦工大を定年退職することになりました。東大大学院修士課程を修了して郷里の設計事務所にいた時、突然恩師の梅村魁先生から研究室に戻ることを薦められ、建築構造の研究生活を開始して1年経った時、故浜田大蔵先生を紹介され、1967（昭42）年4月に助手として採用されました。当時は経済成長期で、建築の学生に対する社会的需要は高く、建築学科が建築工学科と2学科に分割されても、なお建築学科学生が増員され二クラス制に編成された時代のことです。助手の地位は低く、同じ講義が1週間に2度繰り返されるので、専任・非常勤の先生の授業の手伝いの他、演習・実験そして構造設計などには必ず参加しなければならず、一週間に14コマの教育補助を行うこともありました。

間もなく70年安保の批准を控えて全国的な学園紛争が起こり、芝浦工大にはじめて教職員組合が結成されました。いつの間にか田町教員分会長に選出され、100名を超える組合員と共に芝浦工大の民主化闘争に参加することになりました。本学の学園紛争も激しさを増し、2クラス制は廃止されたものの、バリケードがあって校舎内には立ち入ることができなくなりました。RC梁の試験体が学生の投石と化し、研究が不能となりスポンサーにお詫びをしなければならないこともありました。これらの出来事は終生忘れることができません。

当時の研究室は北校舎五階で、構造の教員5名は相部屋でした。浜田先生の所には色々な学科の先生が相談に見えたので、大学の事情は自然と知ることができました。個々の学生指導や研究のことを除けば、大学の運営や教育方針など教員同志で話し合うには恰好の場所で、講座制が廃止され独立した研究室となった現在の良さはありますが、当時に比べて教員間の親密性が失われてきていることは残念に思います。

何しろ芝浦に採用された5年間は研究に没頭できるような時期ではありませんでした。73（昭48）年に学生のカリキュラムが大幅に改正整備され、卒業単位が150数単位から124単位に、今までの詰め込み授業から学生の主体性を重んじた授業に変更が行われた直後のことです。私自身は数年研究らしいことができておらず、世の中の技術進歩から取残されたことが心配になり、半年ですが米国カリフォルニア大学バークレー校への留学を大学から認めて頂くことができました。当時はクラフ、ペンゼン、ベルテロ、スコールドイルなど著名な教授が多く、環境の良いところでの勉学は、大学での研究継続が可能であるとの気持ちにさせてくれ、今でも大変感謝しています。

さて、自分の研究を振り返ってみると、この時点まで博士の学位がなく、専任講師止まりでした。芝浦工大に採用されてからも「RC太径異形鉄筋の付着性状に関する研究」を継続していました。

## 光陰矢の如き芝浦時代の回顧2 教授 山本泰稔

本学では実験設備・予算などが足りず、東大の大型構造物試験場で、石鍋元章氏や卒論生に助けられながら研究しましたが、付着の本質が掴めず、成果をまとめることができませんでした。研究指導を受けた梅村先生や青山博之先生には大変迷惑をかけてしまいました。今でも最も気になることの一つで、ライフワークとして胸の奥底に仕舞い込んでいます。

次がエキスパンドメタルを曲げやせん断の補強筋として使用する研究です。非常勤講師の鈴木悦郎先生（大成建設）の指導でした。RC造の工業化に関連した研究で、東京工大や千葉県の幕張で、大規模実験を行いました。新宿センタービルの可変剛性耐震壁や、その他、帯筋やスラブ筋として使用されました。構造的な性能は優れているのですが、鉄筋がナイフのように鋭い角度を持つので、施工の段階で怪我をしやすく、広く普及はしませんでした。施工性の重要さを思い知らされました。

さらに既存建物の耐震診断と耐震補強の研究です。78年6月法律「大規模地震対策臨時措置法」が成立し、静岡県が強化地域に指定された時期、東大を退官された梅村先生が芝浦工大建築工学科に着任されました。丁度日本建築学会長に着かれた年です。建築学科でも既存建物の耐震診断で、清水市庁舎、文化放送、日銀支店等、規模の大きい建物の診断に、清田・上村・林の各先生と共に参加しました。青山博之・岡田恒男・村上雅也先生などの指導を受けている時、既存のRC造を鉄骨補強する案が浮上し、文部省の科学研究費や静岡県の委託研究費で大規模実験を行うことになりました。残念ながら芝浦に設備がなく、東大で3年間実験を続けました。その成果が私の博士論文となった、「枠付き鉄骨耐震補強工法」です。現在、学校建築の耐震補強ではこの工法を80%近く採用していますが、多くの方々のお力添えで成功したものです。RC造は鉄骨系の助けで大幅な靱性改善が可能となることを確信できました。

その後、鋼板を内蔵する鉄筋コンクリートの研究に携わりましたが、現在は「鋼板内蔵型の外付け補強工法」を、矢作建設工業(株)と産学共同研究で実用化し、この5年間で、実施例は100棟を超えました。どこかでみる機会があったら、芝浦工大で開発したことを思い出して頂けると幸いです。

私が研究で最も誇りにしていることは、芝浦工大を基地にして、何とか研究ができたことです。特に、外国のヒルティ社（リヒテンシュタイン公国）から「低強度コンクリート造建物の耐震補強」に関する研究助成を受けたこともささやかな誇りです。

多くの先輩や同僚、それに卒業生に支えられた自分史を述べましたが、やり残した事も多く、今後の楽しみとして去ります。最後に、愛する「芝浦建築会」の益々の発展をお祈りします。

# がんばっていますか-1 加藤 實

## 芝浦工業大学 建築会 会報 第20号

発行  
東京都港区芝浦3-9-14  
芝浦工業大学建築会

昔の職人は凄い。その技術屋集団を駆使した設計者も。最近、僕は昭和初期の幾つかの建築の細部を観る機会に恵まれ、都度、実感し感服し、落胆することしきりである。仕事を裏切っていないことが如実に見て取れる。それにしても現実には酷過ぎる。

10年程前から僕は建築装飾に嵌まって、建築設計の傍ら装飾鍛造屋のオヤジをやっている。既知の領域とは言え、それ迄とは全く逆の立場で逆な扱われ方を経験している。事務所や現場には想像には遠かった認め難いことが多過ぎて、書きたいことがいっぱい。そんなところにこの原稿依頼。自戒を込めて老設計者の戯言として書くことを引き受けた。

バブルの崩壊後、随分多くの設計事務所が何処かへ行ってしまった。建築家は潰しが利かない業種の最たるものなのだから、転業は考え難い。だとするといったい何処へ。事務所を整理した設計者、事務所のリストラで放り出されたスタッフの多くが自宅に孤立して頑張っているようだ。大事務所に偏った仕事の下請けや、図面描きでチャンス待ち。自宅アトリエ派の設計者が激増している。かつての2・3人分の仕事が机一つにパソコンを据えれば一応はこなせる。一見きれいな図面が描けるパソコンに錯覚させられていないだろうか。社会の大きなリストラ期の今、こんな形のリストラは甚だ哀しい。

経済的には不安定な小中事務所に相応な仕事までもが大事務所に偏る現象を、クライアントの立場に置き換えてみると、残念だが納得出来る現実が悔しい。設計者の不勉強のツケが回って来ている。事務所の規模の大小を問わず、おおかたの設計者が不勉強・事知らずなら、安全のために少しでも大きな事務所を選ぶ現象は否めない。スーパーマーケットとそれらが経営するコンビニ、百元ショップに大部分の消費者が取り込まれ、商店街の開かずのシャッターが増え続ける現実を見ても、問題は感じるが納得せざるを得ない。一部の例外を除いても、専門店もがスーパーの傘下に潜り込んで行く。設計事務所も同様なのかと、嘆きつつ思う。

こんな状況下で社会に役立つ設計者が育つのだろうか。育つとしてもどう育つのだろうか。冒險の無い無難でつまらない新鮮味の無い建築の時代が何時まで続くのだろうか。大学を出、一応の就職をし、講習屋のお世話になって一級建築士の資格は取得。けじめとして何しろ一級だけはと頑張ったその挙げ句が孤立・下請けでは哀しい。どれだけ年季を重ねても、育つことに無理を感じる。設計に必須の筈の広い見聞の機会を得難い状況に、僕は希望を持つことが出来ない。孤立は日雇いとさほど違いのない状態が常なのだから。難儀ではあるだろうが、今こそ学び育って欲しいと思う。事知らずがもたらす現実が目にも余り過ぎると思えるから。



# がんばっていますか-2 加藤 實

材種・材質、製造工程、現場での作業工程などを熟知して初めて図面は描けるものなのだが、設計者の皆さんは呆れる程にモノ・事をご存知ないことを、鍛造屋のオヤジをやって知った。一級建築士の資格を持って、パソコンを駆使して作図することに長けても、事務所と現場で小突き回され恥を重ねて悔やみ反発する経験が得難くなったからと言って、無知で図面を描かれては困る。イメージは面白くても、明確に意図が表現されていなくては、イメージの具現は出来ないことを知って欲しい。創れない。偶然の満足に期待すべきではないのだ。

日々忙しくマウスを走らせているだけでは、実用に堪える図面は描けない。パソコンで描かれた図面は、素晴らしいほど読み難く、概して、欠落が多い。トラブルの引き金になるような重大な欠落が多過ぎる。

サブコンが指し値に喘ぎつつ施工図作成と称して欠落部分の設計を補っているのが現実であるが、この補うことが無言の受注条件になっている現実を肯定してはならないと思う。チョイスばかりで事足りるこの時代が設計者の創造力を削ぎ、罪づくりな図面ばかりが世に出てくる。この数年來、設計者の社会的地位は嘆かわしく凋落の一途だ。パソコンの普及がそれに拍車を掛けていると思える。

パソコンの登場で表現の無限な可能性が得られたのだから、創作のための周到で細密・親切な図面が見られるようになってもいい頃だと思うのだが。設計用で感性表現のためのソフトの開発が遅れているのかも知れない。器用さのためのソフトはあまた開発されているが。

設計者が図面屋を抱え込んででも、実用図面を作らなければならない時に来ていると思うのだが。本来、設計図が施工図でなければならぬ筈。大方のクライアントは設計図で建物が作られていると信じている。製作者や施工者が補足設計をし、実用図に描き改めていることを知ってはいない。実施設計料が確認申請図の作図代であるなら、実情は得心できなくもないが、現状はネコババをまかり通している。この悪弊は問題にしたい。わが国ではゼネコンの見積明細の中に、実施設計料なり実施図料が計上されていないのだから。実用図面であってこそ実施設計図であることを確認したい。外国ゼネコンに乗り込みが許されることになったとき、わが設計者は如何な対応を考えるのだろうか。このリストラ期が国際化のための是正の絶好期と捉えなければならないと思うのだが。



# がんばっていますか-3 加藤 實

老眼が進み、図面が描けなくなり始めていた今から18年前、僕は事務所に製図機としてパソコンを導入し、製図板を全廃した。パース風のスケッチ図しか描けなくなっていた僕に一般図が描けるようになった。それも眼鏡なしで。数年を経て気付いたこと。パソコンで設計図を描いた建物の内容の記憶がとても薄い。老化の所為かとも考えながら、幾人かの仲間に尋ねてみた。誰もが「そう言われればそうだなあ」と言う返事。また、スタッフの能力、建築の理解度が個人の素養とは関係なく向上していないことに気付いた。生活体験や生活実感がそれなりに豊富になっている筈なのに。以来、僕はスタッフの具体的な養成を諦めて、パソコンをスタッフにしている。

パソコンでは細密な図面は描けても、精緻な設計は至難だ。安易に図面が描け過ぎる。どうしても安易な側に偏ってしまう。モニターをにらみマウスを走らせる眼と指先だけの作業の中では、設計に己を反映させることがとても難しい。Aゼロ用の製図板に文字道り立ち向かい、芯削りで芯先を尖らせ、コンパスと雲形定規で気に入りのカーブを探す。腰をくの字に折ってA1の上の方を仕上げる。度々腰を伸ばして煙草に火を着ける。四肢を使って描いていた頃のドイツ式や英式の製図器、ドラフターや鉛筆が懐かしい。当時の仕事は今も鮮明に思い起こすことができる。パソコンは記憶の深層に事象を定着させる能力を低下させ、自己の実績を鮮明には蓄積出来ないとすると、デスクに画像として蓄積しているとは言え、頼りにしたいキャリアが頼りに出来なくなる。「キャリアとはそんなものさ」では済ませたくない。

パソコンの普及に因ってか、問われても答えられず、殊更に威張って、問われないように相手を近づき難く振舞う設計者が目立つが、それにしても、パソコンは有難い。言う事だけはすこぶる良く効いてくれる。しかし、パソコンに設計が差配されるとしたら、後進が育ち難いとしたら、これは情けない。パソコンは喰えなくなっても喰わせてくれる道具ではあるが。

(1961年卒 (株)加藤實建築設計事務所)

〔さぶろく会 今次欠席メンバー各位へ〕

9月27日、強羅温泉にさぶろく会 = 建築36年卒の会の16名が集い、初秋の一夜を飲み明かしました。明年は四十五周年、も少し盛大に挙行予定です。

新キャンパスの建設にOBが積極的に参加できる機会が何故用意されないのか。新キャンパスの建設情報が余りにも少な過ぎると思わないか。が際立った話題でした。



# 人と自然と建築の調和を求めて 松本 花子

今回のアテネオリンピックの日本の金メダルの数は歴代最多の16個を獲得した。このうち過半を越える九個は女性陣の活躍によるもの。このようにスポ-ツ界を始め、各方面での女性の躍進は目覚ましく、男性と同じように女性が仕事を持つことは珍しいことではなくなつた。女性が開放される良き時代になりつつある。こうした状勢も一夜にして成立したわけではなく、気の遠くなるような犠牲と時間を伴って、徐々に改革されてきたものである。

女性問題と同様に私が期待しているもう一つの改革は、自然とその四季の変化の美しさを感じるような街並みが出来る事である。私が建築家を志したのは東京が戦後の荒廃から少しずつ立ち直り始め、平和と共に新しい時代の美しい街並みが再生出来るのではないかと、期待と夢を追い求めたからである。そのために少しでも役立ちたいと。しかし現実には経済至上主義の下状況は悪夢と化した。伝統的な風景は何のためらいもなく壊し続け、世界に誇るべき美しい自然は人間の造形物で必要以上に手を加え台なしにしてしまっている。都市再生も目立つのは高層ビルばかり。その光景は年毎に加速し、顕著になっているような有様である。地方ごとに特色ある街並みは失われ、国道沿いに目を背けたくくなるような粗悪な建造物が広がっていても、手を拱いている外に何も出来ないのが残念でならない。

それでも設計に携わるチャンスが与えられた時、人と自然と建築の調和を求めて、建築が周辺地域に及ぼす影響を考えながら設計を進めている。それは小さなエリアかも知れないが、少しでも周辺環境を配慮した建築ならば、少なからず地域環境の改善に寄与した事になると自負している。一つの建築がやがて、街全体の人と思想の流れを変えてゆく可能性があるからだ。随分大袈裟な言い方だが、自然豊かな風景や美しい景観が感じられる街並みを願っているのは私だけなのだろうか。

最近、街並みの美しさを巡り裁判になる例が増えてきている。身近な所でも、歩道や並木の緑等に手が加えられ、街並みを楽しもうとする努力が見受けられるようになってきた。「風土から風景が生まれ、風景から景観が生まれる。」と言われるように、女性開放と同様、この国も遅まきながら美しい街並の模索を始めようとしている。

私にどれ程のことができるか、これからも建築の仕事を通して、人と自然と建築の調和を求め続けたい。  
(1966年卒 松本祐建築設計事務所)



# 木造建築教育と高槻ゼミナール 高橋 昌巳

木や土や紙などの自然素材を使い、伝統的な工法での家づくりを専門とする設計事務所を始めて18年目になります。大学在学中は、故嶺岸泰男先生のゼミで先生の御自宅や作品をいくつも拝見したのを覚えています。当時は住宅の設計法が授業の中心であり、木造建築の工法や構法そのものを深く学ぶことはなかったと思います。木造住宅の構造は大工さんまかせというのが大方の設計者の意識にあったのですが、その流れを大きく変えたのが10年前に起きた阪神淡路大震災でした。古い住宅や社寺が倒壊し、街が何日も炎上し続ける映像は木造建築の設計に関わる自分にとっても衝撃的な出来事でした。以来、仲間の設計者と集まっては木構造の勉強や実大実験の立会いなどを続け、循環型の社会に適応した丈夫で長持ちする家づくりを目指しています。

4年前から、大学が木造建築の教育に真剣に取り組み始めたことで、大工の常山泰弘氏と材木屋の岡部馨氏と共に二年生を対象として半日授業を引き受けています。材木のサンプルや木組み模型やスライドを使いながら、木構造の解説と実例の紹介や建築現場での問題点などを話します。学生は住宅展示場や現場などを見て廻り、夏休み明けの9月に福島県の高槻セミナーハウスで行われるゼミナールで最後にグループ発表を行います。私も一度このゼミに参加したことがありますが、徹夜も含めての3日間のゼミは、自分達で問題を見つけ解決法を考える訓練の場であり、教師が黙って見守ることに徹していたのが印象的でした。

状況を自分で判断できる自立した人間であることが必要な建築関係者にとって、学生の自主性に任せる教育がますます求められる時代だと思います。産学協同によって、すぐに役立つ人材を育てることも意味はあるのでしょうか。しかし、建築家志望の若者を何人か雇う身になってみると、中途半端な知識や図面のうまさよりも、とことん建築が好きで自分のスタイルを譲ろうとしない、一風変わった人間を採用している自分に気がつきます。新卒の学生よりも、一度社会に出て本気で木造をやりたいと気が付いてから事務所に入ってくる人が着実に伸びていきます。10年前までは、学問の対象とすらされていなかった木造建築ですが、唯一再生産可能な建築資材としての木に注目が集まることで、ますます可能性の広がる面白い分野になってきました。50歳を過ぎて、ドキドキ・ワクワクする毎日が続いています。

(1976年卒 (株)シティ環境建築設計)

# 生かされているということ-1 明石 雅弘

生きるということはまことにもって難儀なことである。

このことはどんなに恵まれているように見える人でも例外ではない。経済的に恵まれていても、健康は思うにまかせない。また健康であっても、人間関係の困難さを避けることは難しい。まして、生活してゆくことの苦労は言うに及ばない。たとえこれらを総てクリアしている人でも、生きる目標を見付けられないでいる人もいる。本当に人生は難儀の連続である。今年を振り返るにはまだ早すぎるが、私にとっての2004年は正にこの難儀の嵐のような年となった。元旦は父の危篤から始まり（郷里から東京に転院闘病中）、身体じゅうに繋がれたチューブで満身創痍のなか、旅立ったのが正月明けの1月7日。およそ1年に及ぶ家族総出での介護の末のことだった。郷里広島で入院療養中の母にひと目会わせるため、父の棺を空輸しての郷里での葬儀。49日法要を終える間も無く、今度は母を東京に転院させるべく八方手を尽くすが、老人性痴呆と末期癌という二つの大病を抱えた母を受け入れてくれる病院は東京には無く、この国の縦割りの医療行政の貧しさとその寒々しい実態には途方に暮れるばかりであった。結局東京への転院をあきらめ、「癌の治療を放棄する」という苦渋の条件で受け入れてもらった広島痴呆専門病院で療養することになった。しかし遠距離介護の日々も四月下旬には限界を迎え、ホスピスへの転院を求められる。ホスピスは死を自覚した人が痛みの緩和ケアを受けながら最期の日々を家族と静かに過ごすところであるが、痴呆の進んだ母に死の自覚がある筈もなく、ホスピスサイドの考え方に患者の家族として戸惑いながらの転院であった。そして父の死からまだ4ヶ月半のことしの5月、母も父を追うことになるのだった。

丁度そんな慌ただしい中、母の危篤の時期とシンクロするかのように私自身の不覚の大病が発覚する。50年の人生で一度も病気らしい病気をしたことが無く、「無事これ名馬なり。」を地でゆくかの如き私が選りによって「この時期に何故？」と自問自答するも答えは見えず。人生とはなんと難儀なことだろう。



## 生かされているということ-2 明石 雅弘

広島の高橋の母を見舞いながら、東京の病院で自身のオペに向けた検査の日々。結局母の死に目には立ち会えなかったものの、喪主として母の葬儀を無事出した夜に私ひとり帰京し、翌日入院。以後3ヶ月の長きに渡る入院生活となる。オペ後2日間の記憶は全く無く、その後の一週間は痛みと悪夢の地獄だった。その後は回復の一途と思いきや、思わぬ合併症に苦しみ足踏みの日々。悶々としながら6月初めから結局ひと夏を病院で過ごすことになり、退院が決まった頃には秋の気配が漂っていた。

この一連の出来事の中で失ったものも多々あったが、得たものも多かったことに最近気付いた。両親の死や自身の生命の危機に際して、自分でも驚くほど冷静であり続けられたこと。両親は逝ってしまったけれど、私にはまだこの世界でやり残した課題があると「目に見えない大きな存在」に言われている気がしていたからかもしれない。家族の絆は強まり、思わぬ人々の愛情や友情に改めて気付かされ、厚意に甘んじてお世話になり感謝する日々。人生どこに落とし穴があるか判らないことを痛感し、「やりたい事は先延ばしにしない。」など大きな教訓を得ることができ、この10月より仕事にも復帰した。

「あきらめる」とは仏教の世界では「明らかに究めること」すなわち「心してあるがままの現実を直視すること」だという。色々な事を日々あきらめ続けながら、大きな流れに身を任せ、「なるようにしかならない。」と思い定め、そして「しかし必ずなるべきようになるのだ。」と呟いてみる。生かされていることに感謝しつつ、これからは多少なりとも世の中のお役に立てれば嬉しいなと思うこの頃である。

(1981年卒 (株)明石雅弘建築・都市デザインシステム)





# 18年目の里帰り 鈴木 泉

今夏の酷暑を予感させる蒸し暑い初夏の6月4日(金)、10年近い歲月、音信が途絶していた友人Nくんが、芝浦建築フォーラム“円座”講師として招かれました。

私の勤務先に所属するSくんから、Nくんが“円座”で講師を務めることを知らされたので、在学時代Sくんと共に、毛井先生が主宰するゼミで生活を共にしたFくんにも連絡を取り、Sくんと3人で芝浦に駆け付け、Nくんにエールを送りに行ったのですが、その“円座”での勉強会後の懇親会に、私も友人共々出席させていただき、その時、ついに“建築会”の幹事の方々に、私の“人となり”を知られることとなりました。

前置きがいささか長くなりましたが、私は、本年9月に建築会より、“建築会学年幹事就任”の指名を受けた、鈴木泉と申します。“幹事就任依頼”直後、“「近況報告」を中心に”という趣旨の寄稿依頼がありましたので、本稿を認める次第です。

近況報告前に、私の経歴を簡単に述べさせていただきますが、建築学科では、唐澤先生に卒業設計の指導を仰ぎ、毛井先生とは自発的なゼミで空間構成の研究や公開コンペへ参加等の活動を行い、さらに石川先生の事務所ではアルバイトさせていただきました。また、課外活動では一般教養ゼミであり文化会の同好会でもある“お城の研究会”に所属しつつ、3年生の時には芝浦祭の実行委員として、三井所先生、相田先生、三宅先生を講師に招いた講演会を企画し、4年生の時は、卒業アルバムの編集に携わりました。さらに、建築学科卒業後は大学院に進学したのですが、芝浦祭の講師をお願いした縁により、建築工学科の三宅先生に師事しました。毛井先生によれば、私は、「何処にでも飛び出していく奴。ついには、建築工学科にまで飛び出してしまった。」ということになるようで、少々異端の徒ではあります。大学院生活を送った研究室が建築学科でなかったせいか、卒業後、建築会幹事就任要請はなかったのですが、冒頭で述べた通り、本年6月の“円座”の懇親会の席で、私に“幹事就任”に白羽の矢が立ちました。

院卒後は、本学科卒業生には縁が深い寺尾先生(故人)が役員を務められておられた“佐藤武夫設計事務所(現社名:佐藤総合計画)”に、“挨拶がいい”という理由で採用され、88年本社都市開発 92年本社設計 93年名古屋事務所設計 99年本社設計 00年現職という経歴を辿るのですが、紙数が尽きてしまったので、残念ながら近況についての詳細は割愛します。

学科卒業後、17年余りを経過し、学科へ恩返しができる機会を得た事は幸いに思います。今後とも、宜しくお願いします。

(1986年卒 (株)佐藤総合計画 企画開発)

# 「浜名湖花博」の計画-1 古川 達也

## 芝浦工業大学 建築学会 会報 第20号

「花・緑・水～新たな暮らしの創造～」をテーマとした静岡国際園芸博覧会（通称：浜名湖花博）が開催されました。（開催期間平成16年4月8日～10月11日）

私は、栗生総合計画事務所に在籍し、平成11年より5年間、花博関連施設の設計・監理を担当致しました。その間、平等院宝物館（新建築2001年9月号）の設計・監理や数回のコンペ等の活動が重複しましたが、花博作業はほぼ専属でした。

博覧会はたった半年の開催で、とてもインスタントなイメージがありますが、開催前後にかかわる様々な人や物・環境、企業や県・国といった公共の取り組みは壮大であり、利益や損害、波及効果など大変グローバルなテーマで議論が交わされます。建築や関連施設の計画者として我々に何が出来るのか、多くの人とかかわり協力・議論し続けた5年間でした。

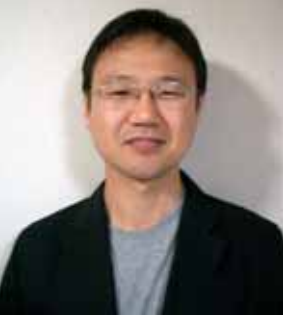
私にとって博覧会計画は、まさに「56haの街を考えてつくる」大変貴重な経験でした。ミニチュア都市を0（ゼロ）からつくるとはどんな世界でしょうか。必要なアイテムは何か、起こりうる問題は何か、機会がありましたら、ぜひお話申し上げたいと思います。

せっかくなので、以下花博で私が担当致しました計画の一部を、説明させていただきます。（詳しくは新建築2004年6月号参照）

会場全体計画（配置計画、花・緑・水、建築、工作物、サイン 他）

浜名湖の湖畔に位置する会場は全体が56haあり、会期後は32haが都市公園として残ります。会期中の環境と活動の成果を、会期後に繋ぎ先導する計画を目指しました。建築単体はもちろんのこと、施設間の繋ぎを重視したランドスケープとしての建築を目指し、素材・視線・空間体験を通じた、植物と建築の強いかかわりを表現しました。さらに、木質系素材が身近にある、新しい暮らしを表現することを目的としました。

発行  
東京都港区芝浦3-9-14  
芝浦工業大学建築会



# 「浜名湖花博」の計画-2 古川 達也

花の街並み（飲食・物販等テナント施設群、トイレ、休憩所他）  
花・緑・人を際立てる背景として、墨色の壁面による施設群を提案し、高密な街並みを計画しました。

アクアプレーン（水景施設）  
長さ180mの平滑な水盤とそこから流れ落ちる180mの滝を計画しました。水盤下は休憩所です。

水の広場（水景施設）  
全体が僅かに傾く石の広場で、全体に薄く水が流れます。広場には、ボードデッキ・遊具・噴水など様々な水を楽しむきっかけを計画しました。

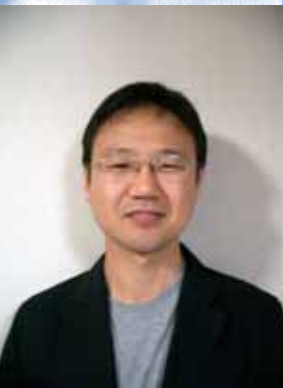
国際花の交流館（展示施設）  
博覧会最大の屋内展示施設です。400立米の地元産スギ・ヒノキの端材を利用するなど、五感を刺激する、快適で記憶に残る空間を計画しました。

P.S.

申し遅れましたが、浜名湖花博の担当終了をもって栗生総合計画事務所を退社し、独立致しました。

現在逗子の一戸建て住宅に取り組んでおり、数日前着工致しました。来年三月竣工なので、オープンハウスの際はぜひお越し頂き、御意見頂きたいと考えております。

（1991年卒業 古川都市建築設計）



建築会の皆様、せん越ながら、皆様の想いをお聞かせ願えませんか。まずは自己紹介から。私は96年に卒業後、住宅メーカーに就職。設計、工事管理、営業とほぼすべての部署を経験した分このままここで終わってしまっているのか。おりからの社会情勢もあり、一大決心。現在は千葉県東葛飾地域整備センター柏整備事務所建築課に所属し、主に確認申請の審査をしております。昨今の指定確認検査機関への確認業務の開放もあり、今、建築行政も大きく変わろうとしております。まだ2年目ですが、少しずつ組織全体が見えてくるようになってきました。この過渡期にこの場所にいられることは、微力ではございますがこんな自分でも何かしらの影響が与えられるのではないかという気概でただ今、模索・奮闘中です。

組織の仕事は大きく3つ。建築計画に対する確認審査、許認可等、既存建築物に対する防災指導。そして政策・事業。計画についてはここ数年で制限内容の多様化、規制値の強化・緩和の選択幅の拡大等、建築基準法の大改正があったことは言うまでもありません。続きまして既存建築物の取り扱いについては、今後、基準法の改正も含めて整備中とのこと。耐震改修はもとより、今年度から法十二条の定期報告制度の充実。さらには、法三条二項の既存不適格建築物の段階的な増改築も認め、順次適合させいくという制度（既存不適格建築物の改修の促進）が施行予定（H16.6.2公布、施行1年以内）です。

ここからは個人的見解ですが、学生時代は計画系で、当時4年間という短いながらも多くの良き先生方や級友にめぐり会えたこともあり、建築に対する理念、理想、人の想いというか、その奥深さに素晴らしさを感じつつ、今もその気持ちは変わりません。これまで私たちの立場でやっている個々の建築物と、都市計画とのすき間を埋める、より地域の実情にあったまちなみ、まちづくり的なことにうまく取り組み、かかわっていくことは出来ないか、そんなことを今考えております。「まちづくり」と言ってもいろいろな切り口もありますし、今日ではNPOや市民団体等の活動も聞こえてくるようになりました。しかし、こちら側にはそのようなセクションが、さしあたってまだ確立されておりません。私もまだまだ日が浅く経験不足で、どうすればやっていけるのか、何が問題でどうしたいのか。果たして、それは地域住民にとっていいことなのか…。まっさきに思いついたのが、の建築会の皆様です。学年幹事をやっていることもあり、どこかでお会いする機会もあるかと思えます。皆様の貴重な経験、ご意見をお聞かせ願えましたら幸いです。至らぬところもございますが、どうかこれからもよろしくお願い申し上げます。

（1996年卒 千葉県東葛飾地域整備センター柏整備事務所）



# 豊洲新キャンパスの進捗状況 木村 雅一

芝浦工業大学豊洲新キャンパスも2006年4月の開校を目指してその全貌が見えつつあります。

躯体工事も九階の鉄骨梁まで取り付き、外装の仕様・デザインもほぼ決まり、先立つ鉄骨工事を追いかけるように次々と外装が取り付き始めています。

今回の特徴である運河棟凱旋門（設計者が名付けた訳ではないが、誰言うとなか呼んでいるのでそれはそれでよいかと思っている）を支える仮設ステージも据え付けられ、来年早々には上棟の運びとなっています。懸念事項は鉄骨の調達が非常に難しい状況が続いており、各施工者の方々はその資材の調達・確保に苦労を重ねられています。

躯体・外装とほぼ順調に経過してはいますが、今後大学の中身にかかわる内装・設備・通信の工事が重要となって来ます。躯体・外装がいくら立派にできてコンテンツがしっかりしていなければ良い大学にはなりません。キャンパスは器だけではなく、大学そのもののコンテンツ（学生・教職員・教育内容を含めた）がキャンパスを創出すると考えており、特に今回のテーマでもある「Tキャンパスを実現するために企画・計画・設計・施工とまだまだ山あり谷あり」の状況が続きます。

本体工事以外でも家具・教育機器・AV機器・実験機器等、あるいはキャンパス内のセキュリティ問題等、検討の時間はいくらあっても足りず、大学側も体制を作り検討を重ねているにもかかわらず、それを追い越すように工事も進行しており、緊張感を持って様々な難問を関係者全ての努力と知恵で乗り越えていく必要があります。

そのような状況にあっても、今回の施工各社は配慮もあって芝浦工業大学OBの方々が随所にいらっしゃり、持ち場持ち場で重要な活躍を見せてくれています。今回の計画は彼らの日夜の努力があって完成に向かってるという感慨があり、彼らの無言の努力を見るにつけ設計者としてもうひと踏ん張りし、何とかより良いキャンパスを大学に引き渡し、うまい酒を酌み交わしたいと考えています。

（1982年卒 日建設計）



# 円座会長を引き受けて 五十川 勝

## 芝浦工業大学 建築学会会報 第20号

発行  
東京都港区芝浦3-9-14  
芝浦工業大学建築会

昨今の新聞をはじめ多くのマスメディアでは大学の生き残りのための新たな戦略が報じられています。役にたつ大学、研究論文の成果、提出数、知的所有権の移転数、他大学との連携、地域への取組、企業との連携、学内V Bの立ち上げなどですが、一方では定員割れ、学部削減、ひいては大学合併など他人事ではない状況も現実となってきております。このような状況下において我が大学は何処へ向かおうとしているのでしょうか。私にはよく見えません。様々な戦略が進行していることでしょうか。大いに期待したいものです。最近母校の動向が気になり始めたのですがなぜだか理由ははっきりしません。円座を引き受けたからでもありません。時代の空気でしょうか沈静しているものへの関心、消えていくものへの眼差し、が個人的な存在や、時代を動かす波動の影で誰もがほんの少し抱いている思いでしょうか。

OBといっても様々ですが母校が時代に認められ、時代が求める知的集団としてその名を轟かしてもらえることが何よりも励みになり誇りに思えるのです。

野球や駅伝で名声を上げるもよし。しかし大学の存在意義は高度な研究成果が導き出す人類の幸福を目指すことです。円座はOBと学生諸君を結ぶ小さな知的運動体です。その向かうべき理念は社会との関わりに常に視点を置き問題解決にむけた提言を続けることの中から社会の問題に挑戦していける人財を送り出すことです。その意味で現役の学生諸君との交流が唯一の戦略です。交友会も様々な活動をされているようですが。大学の廻りで私的ではありますが長年知的活動を自助努力で行ってきたこのような諸団体にもユニバーサルな視野から支援の在り方をぜひ議題に上げていただきたいとおもいます。ともあれこれまでの十年の先達の功績を竿灯にし理念の達成にむけ、若者と共に進みたいとおもいます。



円座賞 審査会風景

(1966年卒 (株)M・I都市設計)

## OB著書紹介

# 『やっぱり昔ながらの木の家がいい』

辻垣正彦著 晶文社 1680円

この本は、これから家を建てる、人向けに出版されたもので、とても読みやすく、とてもいい本です。著者は、本校建築学科 昭和39年卒の 辻垣正彦さんです。長年の研究の成果として、この本を書きました。

なぜ いい本 かというと、著者の木造にたいするこだわりが「安心して住める家づくり」を基本理念としているからです。なかでも合板がシックハウスを生み、さらに パプアニューギニアや南米等の、森を破壊し、同時に日本の森をダメにする、惨状を訴えています。また、今日の日本の家は、接着剤のかたまりの 2X4 パネル工法で、日本の伝統技術を捨て、26年しかもたない家を、大量生産している、ことを嘆いています。

日本の家づくりは、さまざまな問題点を抱えたまま、ますます加速しています。私は、この本を一気に読みました。そうですこの本は建築家に向けた本でもあるのです。日本の住宅づくりは、これでよいのか、建築家がもう一度、じっくりと反省しなければなりません。同時に、建築科の学生には、必ず読んでいただきたい。特にこれから進路を決めなければいけない、学生には、職業倫理を学ぶためにも、是非一読していただきたいものです。

私の友人で西武文理大学客員教授の小田孝治さんは、伝統を明日につなげる職人たち「日本の技」の著者でもあって、彼は大学でシックハウスのこと、日本の伝統技術である、木造軸組工法のことを、この本を使って、学生に説いています。さらにこの本は、鋭い文明批評だといっています。建築編集者の宮内嘉久さんは、この本の書評のなかで、驚くべきことに！日本の建築家を代表する「日本建築家協会」は、現地の人と同行して、パプアニューギニアの森の惨状を訴えに赴いた著者の願いを、ただ聞き流すにとどまったままです。ここに、建築界の廃荒が如実に示された。と語っています。こうしてみると、この本は、建築家や学生に業理念をも示唆する、いい本だと思いました。

巻末には、昔ながらの木の家を求める人のために、工務店のリストがあって、私達にもとても役に立ちます。  
(1964年卒 アトリエRIX 堀江武之)



# 特別講演会への御協力を 3年担任 唐澤 昭夫

ご存知の通り学生の就職活動が早まり、12月中にはエントリーを開始され、早いところでは一月にも会社訪問が開始されているようです。3年の学生諸氏にはとっては、卒業後の進路の選択について考えを巡らし決定せねばならない時期に入っています。小生も12月からは就職担当としての仕事が始まります。

ところが彼らは建築業界での仕事について具体的イメージを持つ事が出来ず、従ってその進路選択が受動的に陥ったり、ムードに流されたりする傾向が例年見受けられる様です。学生の就職に対する希望やイメージと、社会が建築学科卒業生に期待するものや、その結果としての就職の実績と異なっているのが現状です。

そこで、学生が社会の要請と自らを照らして自発的に進路選択を出来る様に、広範囲の建設関連産業とその仕事内容の具体的紹介を行ってはどうかと考え、その方法として、「建築会」の協力を得て、本学科卒業生が如何なるところで如何なる仕事に従事しているのか、またそのなかで如何なる学生を期待しているか、どのような心構えが必要か等を具体的に聞く機会を持たせたいと考えました。

教室会議に諮ったところ、学科のイベントとして是非実現させ、継続させていきたいということになり、先般「建築会」の幹事の方々にお越し頂き、人選等実施に当たる全面的な協力を約束して頂きました。

総合建設業、専門建設業、材料メーカー、設備メーカー、ハウスメーカー、設計事務所、ディベロッパー、インテリア業界、官庁等々、職種で言えば企画、設計、施工、構造、設備など、それに地方や女性の立場で頑張っている人など、多くの場所や立場で活躍している先輩方の話は、学生達にとって正規のカリキュラムでは得られない刺激的で実践的な内容になるでしょう。

早速本年度から実施し、11月、12月、1月の3回、計9人位からお話を伺いたいと思っています。是非後輩の為に力を貸して下さい。

# 建築学科および大学の近況-1 建築学科 林 正司

建築学科は、1954年に設置され、早や半世紀が過ぎました。創世期の教員が若かったこともあり、また教員数の減少もあり、教員の交代があまりありませんでしたが、ここ数年定年により退職する教員が目立つようになり、学科の教員の入れ替えが急速に進もうとしています。既に、橋本、石黒、石川の三先生が退職され、本年度末に山本先生が退職されます。さらに、来年度には、三井所、清田、塘先生が退かれる予定です。

一方、次の世代を担う教員の補充が行われています。歴史の藤澤、地域デザインの志村、設計の堀越先生が既に新たに就任され、さらに現在設計と構造の教員各一名の採用手続きが進んでいます。現在は新旧の教員の交代時期であり、若い先生方を中心に新しい建築の教育のあり方についての議論が開始されております。主なイベントとしては、1年生の4月の入学直後のプレゼミ合宿、2年生の夏の高杖高原での合宿、3年生の夏季休暇中の建築実習などがありますが、いずれも内容は新しい教員を迎えて内容がかなり変化してきます。また学科主催、建築会後援のデザインチャンピオンシップ（詳細は別記事参照）も学科のとどまらず建築系学生院生全体が強い関心を持ち今年は3回目を迎えています。

この教員の大幅な入れ替えの現象は建築学科だけでなく、工学部全体では今後数年で定年退職だけでも80名以上が予定されており、新しい豊洲キャンパスでは教員も一新されます。

そこで工学部でも、豊洲への移転をきっかけとして、新しい大学に脱皮すべく若手を中心として検討が活発に進められています。ここでひとつ不安を感じることは、大学紛争時に学生・教員を悩ませた大学のあり方、学生・教員のあり方・社会的責任という議論がほとんど行われず、即戦力としての学生、中堅技術者の育成、研究者としての教員などという言葉が平然と語られることです。一方では、いよいよ少子化の波が大学まで及び、大学の差別化がこれから急速に進むことが予測され、本学での教育の質の高さがますます問われる状況になっています。本学の卒業生が社会的に評価され、様々な組織の中で重要な位置につくことが本学の繁栄につながることを考えると、専門教育の中身とともに、人間の資質に関わる部分に大きなそして重い影響を与える教養教育についても真剣に考える必要があります。しかし建築学科を除くと他の教員はほとんどこの重要性を理解できないようです。

## 建築学科および大学の近況-2 建築学科 林 正司

新規教員の最近の応募・採用状況を見ると、企業に勤めている方の応募が増えており、大学に新しい風を入れるためには大変好ましいことありがたいことと歓迎しています。しかし、企業において研究・実務の一線から離れマネジメントに移行した方の応募が多く、新しい風を入れるという目的からはそれる例が少ない感じが致します。大学の閉鎖性を打破する必要性は内部にいる者として十分に理解していますがこれを解消する難しさを理解していただければと考え、ここで触れさせて頂きました。皆様の大学のあり方に対する率直なご意見をいただき真剣に議論が続けられればより良い学科とすることが出来ると思います。今後ともご協力を心よりお願い致します。

### 2003年度建築学科 学位記授与式

2003年度の建築学科の学位記授与式（以下卒業式）が、大学全体の学位記授与式終了後、銀座東急ホテルにおいて挙行されました。先輩諸氏の中には学科の卒業式の存在が不思議に思える世代もあるかと思えます。

大学紛争終了後、しばらくは大学の卒業式も簡素になり、式終了後に式場のロビーで学位記（以下卒業証書）を配布していた時代もありました。建築学科では、一生に一度の大切な節目と考え、学科で独自に会場を設定して学位記を一人ひとりに渡して、後半は学生主催の卒業記念パーティという企画を立て実行しました。やがて他学科にもこの方式が徐々に伝わり、現在ではほとんどの学科が様々な形で実行しています。

学科の卒業式では、114名への卒業証書の授与のほかに、成績優秀者、卒業設計優秀者、卒業研究優秀者を表彰しています。特に成績最優秀者に対しては、本会より建築会賞が贈られますが、今年は諏訪由希子君が受賞し、石井建築会長より賞状と副賞の楯が授与されました。また、卒業設計最優秀賞である三浦賞は大城達郎君が受賞しました。

今年も新たに114名が巣立ってゆきました。諸先輩の一層のお引立てをお願い致します

# 建築学科および大学の近況-3 建築学科 林 正司

## 最近の就職・進学状況

今春の卒業生の進路の状況は、就職については現4年生の状況と比較すると求人数が少なく、逆に言えば今年は景気の先行きに明るい見通しを持つ企業がかなり増えた感があります。昨年求人を抑えた反動があり、また団塊世代の退職時期とも重なり、かなりの求人があります。昨年度は状況が悪かったのですが、それでも学生数に比べるとかなり多くの求人数があり、その気があれば職を得ることは難しいことではない状況でした。しかし実際の就職状況は芳しいものではありませんでした。なぜ？ 学生の動向を見ると、今春卒業生と現四年生ともに、職業の選択にかなりの偏りがあります。自分は何が出来るのか、ではなく、何がやりたいのか、で進路を考えるようです。これは低学年では当然でしょうが、最近はこれが卒業時まで変化しません。親が一般的には最も収入が多い世代でもあり、子供が大人になることを少し延ばす事を許すことも一員と考えられます。先頃イラクで自分探しの旅を終えてしまった青年や、モラトリアム、パラサイトといった言葉が当てはまるような例が少なくありません。内容を見ると、施工部門への希望者が近年激減し、近年最悪であった昨年度でさえ、施工については求人数を満たすことは出来ませんでした。

建築業界でも最も大切なもののひとつであるものを造る職業に就くことを避ける原因が分からず学科も困惑しています。学生には施工部門は相変わらず体力と度胸だけが勝負とのイメージが強いのも事実です。これまで建築学科では職業指導は積極的には行わず本人の主体性を尊重してきました。しかしこの傾向から多少考え方を変更する必要があるのか、という意見も出始めています。例えば、第一線で活躍されている諸先輩の活躍ぶりをご本人の口から語って頂き、実務の面白さ、奥深さなどを直接学生に伝える機会を多く設けるなどを検討しております。これが具体化すると、皆様のご協力をお願いすることになります。その節はよろしくお願い申し上げます。

大学院へは、二割以上が進学しこれは毎年増える傾向にあります。また元気の良い学生は他大学の院へも積極的に挑戦しており良い結果が得られています。またこれが他の学生への刺激にもなり、また院への進学後も他大との情報交換が活発に行われ、より良い影響を齎しているようです。成績の良い学生を他大に捕られる例も多く残念ですが学科の活性化の一因にもなっており、痛し痒しの状況です。

# 芝浦工大デザインチャンピオンシップ 教授 毛井 正典

今年で3回目を迎える建築学科主催の建築デザインチャンピオンシップが芝浦祭の期間（11月6、7日）に行われました。この企画は建築学科の建築デザイン教育の一貫として2年前から実施されているもので、毎年学外から話題の建築家を招き講演会と設計コンペを行います。今年はゲスト審査員には、建築家内藤廣氏を向かえ夏休み前に「動く構造体」というテーマで講演と課題の出題が行われ11月4日作品の提出が締め切られました。

応募は学部1年生から大学院生まで合計34点のいずれ劣らぬ力作の図面と模型が勢ぞろいしました。全作品は建築学科製図室に展示され一次審査通過の15作品について11月6日（土）午後2時より発表と講評が行われ、最優秀賞には、大学院1年生の佐々政朋君の「可変四面体構造住宅」が選ばれ、内藤審査委員長より賞状と豪華商品（芝浦工業大学建築会より）が手渡されました。続く優秀賞には建築学科3年の原嶋広樹君と堀越雅也君の「Transforming House」、建築学科2年の日野潤平君の「山田太郎家」の2点が選ばれました。その後内藤氏をはじめ、建築学科教員も加わって懇親会が和やかに夜7時過ぎまで行われ、今年のデザインチャンピオンシップを締めくくりました。



# 芝浦工業大学 建築学会会報 第20号

発行  
東京都港区芝浦3-9-14  
芝浦工業大学建築会

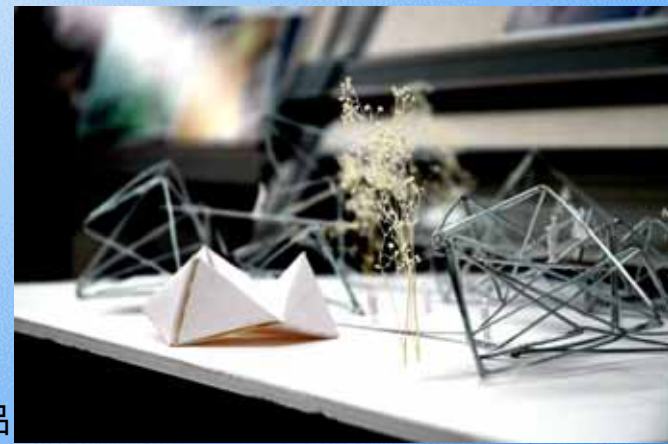
## 三浦賞/チャンピオンシップ 最優秀賞/円座賞



卒業設計最優秀賞（三浦賞）  
大城達郎君の作品



円座賞 清水有君の作品



チャンピオンシップ最優秀賞 佐々政朋君の作品



# 編集後記

常任幹事 井家 常雄

# 芝浦工業大学 建築学会 会報 第20号

今年は建築学会会報も記念の20号の発行に至りました。これも偏に会員皆様のご支援の賜物と感謝しております。アテネオリンピックの日本選手の活躍や、イチロー選手、松井選手等の活躍で楽しかった思いも、記録的な台風上陸による各地での被害、新潟県中越地震の甚大な被害を見ると、自然に対して建築の弱さを考えさせられます。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

さて、建築会も一昨年より建築工学科の建友会との交流を図っております。更に他の学科との交流も広げていき、芝浦工業大学卒業生の社会での素晴らしい活躍を発表していきたいとおもいます。2年後には完成する豊洲新校舎が『白亜の殿堂』と成り得るには、卒業生の活躍が不可欠となります。その為にも会員皆様相互の活動の場として会報を十二分にご利用してください。本年から「OB著書紹介」コーナーも設けました。推薦したい著作物がありましたら、ぜひ寄稿してください。

唐沢先生からの寄稿にある通り、大学での「特別講演会」に対する協力要請がありました。常設の講演会として企画されたものであり、人選も大変になります。その趣旨に相応しい方を推薦してください。自薦、他薦を問いません。

更に本年より、阿部泰資氏のご尽力により建築会のホームページも立ち上がって居りますので是非ご利用してください。『たかが建築会』と言われたい様に、石井会長はじめスタッフ一同頑張っていますのでご協力ください。

また、来年度は名簿発行年になりますので、各学年幹事の皆様にご協力していただき、最新の物を作りたいと思っています。

最後にお忙しい最中原稿の執筆を快くお引き受けて下さいました皆様方に深く感謝いたします。